

～自分らしさとキリスト教と経営者～

私は、「自分らしく生きる」ということを人生の指針としている。ところが、これがとても難しい。なぜなら、思いの外、自分自身を正確に知ることが困難なためだ。その要因の一つは、他者からの評価である。50歳を過ぎた今も、時として「自分がこうしたい」というのではなく、「こうすれば恰好が良いのではないか」などと考えてしまうのである。また、誰からきかれた訳でもないのに「俺って、こんなに凄いだぜ」、なんて自慢話をしてしまったりして。我ながら、本当に小さい人間なのである。

他者の評価を気にするというのは、私の中に、承認欲求が存在するためだ。承認欲求は、心理学者マズローが示す指標の4番目にも登場し、人にとって先天的なもので、その呪縛からは永遠に逃れることができないのかもしれない。しかし、私にとって、それは、強すぎれば自分自身へのピュアな観察眼を歪めてしまう、克服すべき課題の一つなのである。

さて、ここでキリスト教の神様に登場していただく。神様は、譬えそれがどのような人物であったとしても、無条件に承認してくれるらしい。もし、自分の心の中に、小さな神様がいてくれたなら、そして、「私はあなたを認めていますよ」というメッセージを、点光源からの眩い光のように発し続けてくれたなら。

ところで、私は経営者でもある。経営者は、プロ野球の監督と同じように、人に動いてもらって何ぼ、である。それは、選手がポテンシャルを最大限に発揮できる環境を構成するうえで、その中心に位置する存在だ。常に選手達を承認してあげて、かつそれが皆に伝わるよう何らかのメッセージを発信し続けなければならない立場である。そうして、選手に活躍してもらうのである。自分自身が活躍して「みんな、僕のことを認めてくれ給え」などというのは、経営者としては、愚の骨頂であり、このような無知な経営者には、誰も、ついてきてはくれないだろう。いわんや、優秀な人材をや、である。

会社の組織の中で経営者は、本当の神様には及ばないにしても、スタッフ達、仲間全員を承認するという意味で、その役割の一部を担う存在である。もしそうでないなら、皆が自己の持てる能力を最大限に、あるいはそれを超えて、発揮できる訳がないのである。私の中の小さな神様の私に対する振る舞いは、会社組織での、私のみんなに対するそれと、その点において、同じなのである。弊社が成長するための必要条件は、私自身の人間的成長如何という訳だ。

最後に、私の考える現代社会でのあるべき事業会社像とは、組織として、人の役に立つ仕事をするということは勿論、その一員であることによって、メンバー全員が他人にやさしく出来たり、他者の成長を心から喜んであげられる、そのような心理状態を維持できる場である。まるでメンバー全員が神様になったみたいに。その前提条件を構成するためには、経営者がメンバー全員を承認し、メンバー全員が他の皆を承認し…と、主体的かつ能動的な承認の連鎖反応が生じることが一つのファクターであると思うのである。

